

# 觀測部月報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東亞天文協會

## ★遊星面課 PLANETS. 課長 伊達英太郎 (E. Date, President)

火星協同觀測は1944年1月末を以て打切るが、火星を送ると、すぐ後へ木星が迫つてゐる。前回にも一寸記しておいたが、火星がお祭騒ぎされるのに、木星が殆んど觀測されないのは遺憾な事である。木星の表面には火星と又異つた興味がある。火星が相當大きい口径の望遠鏡を要するのに比し、木星は10~15糎の反射鏡を以て充分觀測されるのであるから、もつと木星を觀て頂き度いと大話したい。

さて木星の表面變化につき簡単に記すと、先づ赤道帯(中央を東西に流れる大圈)は、A・S・キリヤムズの説に依れば、11.95年の周期を以て白色(minimum)から赤色系統の色(Maximum)に變化する。このMaxが去る1932年邊りへかけて起つてゐるが、これに對し、マキントッシュはこの周期を新しく7.35年と提唱し、去る1937年をMaxと見てゐる。それで、今どちらの周期から見ても來る1944年(昭和19年)は、赤道帯がMaximumを呈す時に當るわけで、黄色が強くなると共に漸次赤色を混じて來る筈だから、年初から注意が肝要である。

又、上記キリヤムズに依れば、南北兩赤道帶縞(赤道帯の南北兩側を流れる太い縞)が、11.86年の周期で、赤道帯と同様に交互にMaximum(赤味が強くなる)を呈する變化を繰返してゐるが、來るべき1945年は南赤道帯がMaxとなり、北赤道帯がminになる時に當るから、こゝ2~3年は特に木星面に注意を要する時である。

次に、當課木星班では、『觀測手引』に解説してある如く、これ迄は、表面帶縞の各緯度に涉る自轉時間の測定は敬遠してゐたが、本年よりは特にこの方面へも觀測範圍を擴張する事にした。詳細は追記するが、取り敢へず略述すると、各帶縞上に出来る凹陷部、凸出部、濃斑點、白點、黒點等が木星面の子午線通過を眼視的に測時し(3分以内の誤差は許容される)片つぱしからこれを行ふのである。“測微器も使用せずに……”と考へられるかも知れぬが、眼視的に求めた時刻が案外正しく、キリヤムズ氏も、16糎反射赤道儀に依つて、この觀測に専念した。木星觀測の權威フィリップス氏をして、“木星表面觀察に際し、如何に帶縞の微細構造ディテールを正しく描いても、それ等が木星面の中央子午線の通過時刻を記入してゐないものは觀測としての價値は半減する”と稱してゐるのを見ても、この觀測が如何に重要なものかと判る事と思ふ。

木星観測用紙に記されてゐる  $w^1, w^2$  は、前者は第1系(赤道帯)、後者は第2系(南赤道帯の北側から南極迄、及び北赤道帯の南側から北極迄)の各中央経度(太陽に照されてゐる光輝面の)を記入する欄であるが、年月日と、正しい決定時刻(1分迄正しく)を記入されれば、班長の手許で計算する。勿論使用時刻は時報に依り正しく保時する事。

尙、15纏以上の器械所有者に依つて四大衛星の蝕及掩蔽現象の観測に迄及ぼし度く、観測法の詳細は逐次発表の豫定。

土星は別に系統的な観測は行ふ必要はないが、本體上に白斑の出現を時々注意する事が望ましい。

金星は暁天に輝いてゐるが、寧ろ晝間相當の高度の時、双眼鏡又は赤道儀の度盛環を活用して観測する方が、眩惑も感ぜず、良い成績が期待出来る。

★太陽課 SUN 課長代理 山本一清 (Issei Yamamoto. Acting Director.)

札幌の森氏が加はつて、太陽課も可なり観測地がうまく分散することになつた。まだ欠測する人が多いけれど、何とかして之が無くなるやうに願ひたい。各観測者は毎月の報告を出し放しでなく、この誌上に現はれた結果を見て、他の人々(殊に近い地域の人々)のと比べて、もう一度自己の観測手帳を開けて何か思ひ違ひがあるか否かを研究して貰ひたい。群の區分方法などについて、未だ研究の足りない人があるやうに思はれる。いつも言ふことだが、器械や方法を絶対に變へないこと。

伊達英太郎氏が此の月から紅焰の毎日の観測を報告されてゐる。この報告については形式を目下考へてゐる。田上でも紅焰を観測してゐるので、何とか一様の形で発表したいと思ふ。十月中の伊達氏の観測は16ケ日で、紅焰の延数は52ケであつた。11日、18日、19日の分には美しい見取り圖が附せられてある。とにかく、今後、紅焰の観測が増すことが望ましい。

太陽面の黒点の見取り圖(スケチ)を毎日田上へ送つて下さる人は無いか? そのためには特種な経緯度圖を田上から豫じめ送ります。詳しくは天界 268 號を御覽願ひたい。

★流星課 METEORS (142) 課長 小楨幸二郎 (K. Komaki, President.)

十二月の流星群中、著しいものは次の通りである。 December meteors:

期 間	極大日	輻 射 點	附近の星	性 状 其 他
十一月下旬~十二月上旬		$\alpha=156^\circ \quad \delta=+37^\circ$	大熊 $\mu$	速
十二月上旬~中旬	14日	110      +33	双子 $\theta$	顯著, 短, 輻射點移動
〃		119      +29	双子 $\beta$	稍速
21日~23日		225      +75	小熊 $\beta$	タトル彗星 (P=13.5年)

太陽黑點相對數報告 (1943年十月) Sun-spot Relative Nos., October 1943.

觀測者	西山 峰雄	西山 隆	赤坂 陽	保織 善太郎	秋澤 昭二郎	伊藤 高明	竹内 潤	西尾 利夫	松久 博	恒岡 美知	森 涼	前田 大作	沓掛 七二	植田 耕作	吉野 昭三	坂本 務	仁田 大八	青木 章	
Obs.	MN	AA	Hz	SA	TI	Tu	No	HM	YT	DM	Kk	KU	SY	Su				Ai	
(觀測地)	(福岡市)	(福岡市)	(東京)	(東京)	(高知市)	(名古屋)	(名古屋)	(大阪市)	(松江市)	(姫路市)	(札幌)	(東京)	(長野縣)	(大阪市)	(吹田)	(福岡市)	(下關)	(大阪市)	
口径 mm	32	32	55	76	32	32	32	105	58	36	75	45	102	32	150	42	25	100	70
倍率 x	45	45	50	60	44	50	50	75	32	60	64	40	75	50	75	64	31	36	64
方法	D	D	P	D	P	D	D	P	D	D	D	P	D	D	D	P	D	D	P
1	M	M	C	C	13	22	M	12	M	12	23	C	C	23		22			12
2	13	13	C	R	R	C	M	C	R	12	C	C	R	R	C	24			R
3	17	17	22	22	13	22	R	M	R	12	R	22	R	C	C	23			12
4	M	15	22	19	13	22	29	13	12	14	56	22	C	23		26			M
5	M	13	22	16	14	22	25	13	12	11	23	22	12	23		23	11		M
6	M	14	C	C	13	22	M	M	12	11	34	C	C	22	12	22	12		M
7	M	12	C	11	12	11	M	M	11	11	23	C	12	22	12	22	12		11
8	11	12	C	11	12	C	M	M	11	11	12	C	11	11	13	11	M		11
9	R	R	R	R	11	R	C	M	R	11	11	R	R	R	C	R	M		C
10	0	0	R	R	0	R	R	M	0	0	22	R	R	R	M	R	M		R
11	M	0	M	11	0	0	0	M	0	0	11	0	C	0	0	0	M		0
12	M	M	M	11	0	0	M	0	0	0	0	0	0	0	0	0	C	M	M
13	M	0	0	0	0	0	M	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0
14	M	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0
15	M	M	0	0	0	0	M	0	R	C	0	0	C	0	0	0		M	0
16	0	0	0	0	11	0	C	0	0	0	0	0	C	0	0	R		M	0
17	0	0	C	R	0	R	R	C	R	0	C	C	11	R	C	R		R	R
18	0	0	0	12	0	0	M	M	0	0	R	0	0	0	0	0		0	M
19	13	12	M	14	0	0	M	0	0	R	R	M	0	0	0	14		0	0
20	0	0	M	11	0	0	M	0	R	R	0	0	C	0	0	R		0	0
21	0		M	0	0	0	M	M	0	0	0	C	C	0	0	C		0	0
22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	R	0	0	0	0	0		M	0
23	0		0	0	0	0	C	M	0	0	R	0	C	0	0	C		M	0
24	11	11	C	C	C	0	M	C	M	0	11	C	C	0	M	C		M	M
25	11		C	R	R	R	R	R	R	R	12	C	C	R	M	R		M	R
26	11	11	11	11	11	11	13	11	11	11	R	11	M	23	11	12		M	11
27	11	11	11	11	11	11	13	11	11	11	12	11	11	23	11	C		M	11
28	11	11	11	11	12	11	M	11	11	11	34	11	11	23	11	C		M	11
29	13	13	11	14	11	11	M	11	M	11	11	11	11	23	M	13		M	11
30	11	11	11	13	12	11	M	M	11	11	11	11	11	11	M	13		M	11
31	11	11	11	11	11	11	12	M	11	11	11	11	11	11	M	12		M	C
平均 Mean	7	8	8	8	6	8		6	5	6	14	7	7	10	4	12			5
日數 Days	20	23	16	23	28	25	8	15	21	27	23	19	15	25	18	19	3	6	19

上記の中、双子  $\theta$  群が最も盛んな出現を見せるが、極大に當る 14 日頃は滿月直後である爲、その觀測を甚しく妨害される。しかし著名な流星群は月明中でも觀測を忽には出来ない。出現程度は光度からも推定出来るのであるから、觀測を敢行される様希望する。上旬の大熊座  $\mu$  群は、時々豊富な出現を見せるものであるから注意を要する。

× × × ×

今回は本年七〜八月に觀測された結果の綜合報告をする。

觀測者及觀測地 Observers and Localities (昭和十八年七、八月) July and August, 1943

觀測者 Observer	略符 Abbr.	觀測地 Locality	經度(東) Longitude ( $\lambda$ )	緯度(北) Latitude ( $\phi$ )
青木 研甫 K. Aoki	(AK)	神戸市 Kōbé	-135° 15'	+34° 37'
小山千萬樹 T. Koyama	CC	東京 Tōkyo	-139 38	+35 40
海老原勇夫 I. Ebihara	(EB)	東京 Tōkyo	-139 46	+35 43
小橋孝二郎 K. Komaki	Ko	和歌山縣金屋 Kanaya	-135 16	+34 03
川人 武正 T. Kawando	Kw	香川縣觀音寺 Kannonji	-133 43	+34 09
梶村 晴也 H. Kazimura	(KZ)	大阪市 Ōsaka	-135 30	+34 41
中井 善寛 Y. Nakai	(NK)	大阪市 Ōsaka	-135 32	+34 38
野村 修 O. Nomura	Nv	島根縣東仙道 Higasi Sendo	-131 56	+34 41
大石 英夫 H. Ōisi	(OS)	東京都 Tōkyo	-139 42	+35 40
鈴木 久三 K. Suzuki	(SK)	大阪市 Ōsaka	-135 30	+34 37
齋藤 馨兒 S. Saitō	Sr	東 都 Tōkyo	-139 40	+35 38
高橋 正明 M. Takahasi	(TH)	東 都 Tōkyo	-139 43	+35 41
湯淺 一經 K. Yuasa	(Yu)	京都市 Kyōto	-135 47	+35 02

( ) 内の符號は假符號である。Provisinal abbreviations of observers.

以上の外、Fireballs were reported by 塚田三四子(鹽釜市), 北島憲之(京都市), 西尾利夫(大阪市), 工藤晶三(東京), 猪俣康次(大阪市) の諸氏より火球の報告があつた。

觀測の概略 (Daily Summary of Observations)

月日 Date	觀測者 Obs.	開始 Begins	終了 Ends	時間數 Period	流星 向點 L	觀測方向 Direction of watch	Meteors 記錄 Rec'd	見タル Seen	F	備考 Remarks
七月 July										
28-29	Kw	h 1 20 m	h 2 20 m	60 <sup>m</sup>	35.1 <sup>o</sup>	Cet	9	0	0.8	δA6
31-32	//	2 00	3 00	60	39.1	Cet	7	0	0.8	δA5
29-30	(SK)	23 00	1 00	120	36.9	Cap, Aqr	17	7	0.7	δA7+4?
23-24	(EB)	20 45	22 45	120	30.1	Aql, Peg	9	3	0.8	
27-28	Ko	22 07	0 37	90	34.1	Peg, Aqr	28	7	1.0	δA10
28-29	//	22 30	22 55	25	35.0	Aqr	2	0	0.1	δA2

29-30	Ko	1 50	3 10	80	36.2	Pis, Aqr	26	8	0.9	$\delta A7, P3$
30-31	"	1 50	2 15	25	37.1	Aqr, PsA	6	0	0.5	$\delta A3, P1$
31-32	"	1 07	1 52	45	38.1	Lyr, Aqr, Cet	11	2	0.7	$\delta A4, P1$
26-27	Sr	22 00	2 40	280	33.2	Cas-Dra Pis-Aqr	60	10	0.8	$\delta A11$
30-31	"	0 50	3 30	160	37.1	Pis-Aqr Ari-Pis	48	4	0.75	$\delta A13, P1$
31-32	"	23 40	3 35	225	37.9	Aqr, Ari-Pis	67	14	0.75	$\delta A13,$ $P4, 10$ <sub>分休</sub>
26-27	(TH)	21 50	23 00	70	33.1	NE	11	0		
29-30	"	21 40	23 15	95	36.0	NE	15	0		
30-31	"	21 00	22 00	60	36.9	NE	10	0		

## 八月 Aug.

1-2	Sr	23 50	3 40	225	39.0	Aqr, Per	74	23	0.8	$\delta A11, P8$ 5分休
3-4	"	0 40	3 30	165	41.0	Aqr-Cet	55	12	0.8	$\delta A6$
5-6	"	2 25	3 45	80	43.0	Aqr, Cet	26	6	0.7	$\delta A1, P4$
6-7	"	0 50	1 50	60	43.9	Cep	9	4	0.6	$P4$
8-9	"	23 20	3 45	265	45.8	Cas, Per	56	38	0.8	$P16$
10-11	"	2 23	4 48	145	47.8	Per	23	4	0.7	$P5$
11-12	"	1 06	3 46	160	48.8	Per	48	19	0.7	$P18$
2-3	(OS)	20 00	22 00	120	39.8	Cyg, UMa	4	2		$P1$
3-4	"	20 00	22 00	120	40.8	UMa	11	0		
4-5	"	20 15	21 15	60	41.7	Dra, Cyg	13	0		
1-2	Ko	2 10	3 56	100	39.1	Aqr, Per, Peg	40	10	0.95	$\delta A5, P10$ 6分休
2-3	"	0 50	1 40	50	40.0	Aqr, Peg	13	6	0.7	$\delta A4, P2$ $P4,$ 7分休,(1)
9-10	"	3 17	3 54	30	46.9	Per	0	20	0.95	$P21, (1)$
12-13	"	2 57	3 25	28	49.8	Per, Cas	0	27	0.8	
21-23	"	21 46	22 36	50	58.3	Del, Apl	7	1	0.95	
31-32	"	1 15	2 10	55	69.2	Aur	5	1	0.8	
11-12	(NK)	1 15	2 50	95	48.8		0	118		(2)
12-13	"	3 25	4 00	35	49.8	NE	0	25		
13-14	(KZ)	3 45	4 25	40	50.8	NE	0	37		(3)
2-3	Kw	2 00	3 10	70	40.0	Cet	4	0	0.4	
10-11	"	2 30	3 30	60	47.8	Aur, Tau	8	7	1.0	$P5$
9-10	(YU)	1 35	3 35	120	46.6	Cas, Per	23	0	0.8	
20-21	(AK)	20 40	22 00	80	57.3	Sgr	12	2		
22-23	(EB)	21 30	23 30	120	59.3	And	14	3	0.8	
24-25	"	22 50	23 50	60	61.3	Cas	7	1	0.7	
9-10	Nv	2 45	3 45	60	46.9	Per, Cam	8	7	0.8	$P5$
10-11	CC	0 30	3 00	150	47.7	N	41	9	1.0	

備考 Remarks: 時刻は日本中央標準時 Time in J. C. S. T. ( $\lambda = -135^\circ$ )P: ベルセウス群 Perseids,  $\delta A$ : 水瓶 $\delta$ 群  $\delta$ -Aquirids,(1) 津山市 ( $\lambda = -134^\circ 1'$ ,  $\phi = +35^\circ 4'$ )にて観測 (2) 電気科学館 ( $\lambda = -135^\circ 30'$ ,  
 $\phi = +34^\circ 40'$ )にて観測, 佐伯, 梶村, 高田と共同 (3) 高田, 中井と共同

### 流星群の出現状況

七月下旬の水瓶座  $\delta$  流星群 ( $\delta$ -Aquarids in last decade, July) 豫定の観測計畫に基いて、近畿及關東兩班を中心として観測された。これ等の結果から見れば、七月28日頃から八月1日頃までは、平均した様な出現数を示し、一時間7~8個の出現を見た様である。極大は明瞭ではないが、29日又は30日の曉にあつたものの様である。Kw は29日、同群に屬する-2等のものを、Sr は31日に-3等のもの各一個を見てゐる。Average during July 28~Aug. 1 was 7~8/hour max. apparently July 29 or 30' (morning)

八月1日の朝の観測に於て Ko 及 Sr は南魚  $\alpha$  流星群の活動を確認した。Swarm from  $\alpha$  PsA was confirmed on Aug. 1. 輻射點は Ko によれば  $\alpha=342^\circ$ ,  $\delta=-29.5$  (見かけのまゝの位置で) であつた。

猶、水瓶  $\delta$  流星群の活動期に當り、ペルセウス流星群の前驅の外、魚  $\phi$  群、龍  $\phi$  群、魚41群、ペガソス  $\phi$  群等の活動するのが観測された。詳しくは輻射點表(追て發表す)を参照されたい。Beside  $\delta$  Aquarids, displays of Perseid forerunners,  $\phi$  Piscids,  $\phi$  Draconids, 41 Piscids,  $\phi$  Pegasids, etc., were observed.

### 八月のペルセウス座流星群

七月末よりすでに前驅は観測され、八月に入り次第に其の數を増した。しかし、八月10日朝の Ko の観測では一時間10個程度のもので、例年より少いかに思はれたが、13日朝の観測は、さすがに極大を示し、一時間45個(修正値56個)を數ふることが出來た。On Aug. 10, Ko observed (ca. 10/hour), rather few but on Aug. 13 Ca. 45/hour (56, corrected) were observed as max.

水瓶群とともに、同時観測の計畫を立て、同一流星獲得を期待したが、充分効果をあげることが出來なかつた。Sr はこの期間に、ペルセウス流星群の外、同座  $\zeta$  星附近に一流星群の活動するを見てゐる。Simultaneous observations were not fruitful. Sr observed a swarm from  $\zeta$  Persei. (1943-10-31).

## 編輯室より

年末に當り、研究的な寄稿を満載して、全部で70ページの特輯號を會員諸氏に提供します。別頁に記載の如く、“年鑑”は“年表”と改められ、獨立の單行冊子となりますので、一月號は平常通りのものとして、井本、渡邊、山本、松本諸氏の雄編を載せる豫定です。(1943-12-20)